

7 白村江の戦いと廬原氏

～ヤマト政権と国造～

1 東アジアの情勢

7世紀半ばの朝鮮半島は、高句麗、百済、新羅の三国の対立が激しく、武力衝突が繰り返されていた。新羅は、高句麗と百済から絶えず攻撃を受け、唐に救済を求めて形勢の不利を挽回しようとしていた。これに対して唐は、高句麗と百済に新羅との停戦を命じたが、受け入れられなかったため、両国への攻撃を始める。このような東アジアの情勢のなかで、660年に唐と新羅の連合軍は、百済を攻め滅ぼした。

百済の滅亡に際して、百済の遺臣である鬼室福信は、ヤマト政権に百済復興の救援を要請し、また人質としてヤマト政権に送られていた百済王子である余豊璋を百済王に迎えることを申し出た。これに対して齊明天皇は、百済再興の要請を受け入れ、皇太子である中大兄皇子などを従えて筑紫の朝倉宮に入り、百済救済にあたった。しかし、齊明天皇は、661年に朝倉宮で崩御したため、皇太子が天皇に即位しないままに政務をとる称制が行われた。中大兄皇子は、662年に百済再興のための援軍を派遣し、余豊璋を百済王に就任させた。これに対して唐と新羅は、百済攻撃のために連合軍を派遣し、白村江においてヤマト政権の百済再興軍との間で軍事衝突が勃発する。これが663年の白村江の戦いである。

2 廬原君臣の参戦

〈史料1〉は、『日本書紀』天智天皇2年（663）8月13日の条に記載された白村江の戦いに臨む百済王の余豊璋の言葉であり、「日本から救援軍の大將として廬原君臣が強力な援軍を率いてくるので、承知して戦ってほしい」と諸将を鼓舞している。白村江の戦いの結果は、ヤマト政権が支援した百済再興軍が大敗し、日本の400艘余りの船は炎上し、海が真っ赤に染まったと中国の史書は伝えている。〈史料1〉の廬原君臣は、白村江の戦いにおいてどのような戦いをしたかは不明であるが、静岡市清水地区を中心に本拠とした廬原国造である廬原氏の出身である。

平安時代初期に編纂された『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、静岡県内の国造として、遠淡海国造（本拠は磐田を中心）、久努国造（本拠は袋井を中心）、素賀国造（本拠は掛川を中心）、廬原国造、珠流河国造（本拠は富士を中心）、伊豆国造（本拠は伊豆を中心）の六国造をあげている。

廬原国造は、成務天皇の御代に吉備武彦命の子である思加部武彦命が国造を賜ったと記載されている。815（弘仁6）年に完成した『新撰姓氏録』では、吉備建（武）彦がヤマトタケルの東方征討に加わり、その功績により廬原国を賜ったと記している。廬原氏の始祖については、これらの史料や記紀などに多少の違いはみられるが、吉備建彦がヤマトタケルの討伐に加わることから軍事的な性格が強い氏族であった。特に本拠を静岡市清水地区におくことから、清水港（清

（史料1）
廬原君臣は、余豊璋を率いて、日本から救援軍の大將として、海を越えて至らむ。我自ら往きて、白村江に待ち候へむ」といふ。
（『静岡県史』資料編4古代 39頁）

《史料2》は、廬原氏の系図（「菴原公系図」）であり、編者や成立年代などは不詳であるが、白村江の戦いに出兵した廬原君臣がおもた臣足とよばれていたことや、その子の大蓋はおのがさ国造に任命されたことが記されている。また、大蓋の子の虫麻呂はむしまろ国造になっていないが、孫のおびとまろ首麻呂は国造となっている。このことから、廬原国造の継承は、廬原氏のなかで大蓋の子孫だけが継いだのではなく、廬原氏の同族の者を含めた継承であったと考えられる。

廬原君臣が出兵した白村江の戦いにおける敗戦は、唐などの軍隊に攻撃されるかもしれないという強い危機感を生み、ヤマト政権に深刻な影響をもたらした。敗戦後、百済からの亡命貴族などの協力を得て、大宰府に水城や大野城などを築き、対馬から大和にかけた各地に朝鮮式山城を建設するなど、国防を整備した。また、664年には氏上を定め、豪族の領有民を確認するなど豪族層の再編が進められた。こ

白村江の戦いに破れたヤマト政権は、このような中央集権的な支配体制を確立するため、国造制など従来からの支配制度を変革する必要に迫られていった。このように律令制度を整備する過程において中央から国司が派遣され、ヤマト政権の地方支配を支えた国造はその役割を失うこととなる。しかし、国造の一部は、律令体制においても新たに郡司ぐんじなどに任命されることにより、律令制度に再編されていった。



– 19 –